

二〇二五年度

二月四日午後入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、6－1 から 6－14 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

「わたし(佳奈)」はひさしぶりの海外旅行でアイスランドに一人でやって来た。氷河湖を見に行くツアーのバスの中で、日本人の秋月さんと知り合い、一緒に行動している。

秋月さんが、ガイドの人に声を掛け、ホテルではなく、ホットドッグの屋台の近くで降ろしてもらうことにする。

夜、ひとりで食事をしなくてもいいことにもほっとしたが、なにより、秋月さんがわたしを誘ってくれたことがうれしかった。

少なくとも、一緒にいて不快だったとは思われなかったということだ。

個人的なことにはなるべく踏み込まないようにしていたが、どうしても聞いてみたいことがあったから、思い切って口を開く。

「どうして、アイスランドにこようと思ったんですか？」

ニューヨークやロンドンに行くのはわかる。どちらも芝居やミュージカルが盛んだ。ウィーンはオペラだろうか。

「うーん、オーロラが見たかったからですかね。」

そう言った後、彼女は少し笑った。

「そう東京の友達には言いました。どうしてアイスランドに行くのって聞かれたとき。①それも嘘じゃないけど、本当は違うきっかけがあったんです。」

それを聞いていいのだろうか。戸惑っている間に彼女は話し続ける。

「コロナ禍のはじめ。本当中世界中がロックダウンして、ブロードウェイもウエストエンドもすべての舞台が中止になったとき、②レイキャビクの劇場で、ある舞台をやってたんです。」

彼女はその時期を思い出すような遠い目になった。あのときは、先が見えなかった。このまま、檻の中に閉じ込められてしまうのではないかと、ずっと家にいるわたしですら思った。

③「そのニュースを見たとき、今すぐ、レイキャビクに行って、その舞台を見たいと思ったんです。」

「それは……どんな？」

「観客がひとり、舞台の上に俳優がひとり。たったひとりの観客のために演じる舞台。詩の朗読をやっていたと聞きました。世界のほとんどで演劇が止まっても、こうやって安全な形で、灯を絶やさないようにしてくれている場所がある。④そう思うと、すごく勇気づけられたんです。もちろん、今はもうやってないけど、それをやっていた劇場を見て、空気を感じたいと思いました。」

「素敵な話ですね。」

舞台のことをよく知らないわたしでも、胸を打たれた。なにより、ただ大きな劇場で、大勢の人を相手に演じる形式だけが、演劇ではないのだということも、はじめて知った。

華やかな場所など、わたしには遠いものだと思っていた。でも、そんな舞台ならば、わたしが見に行っても疎外されたような気持ちにはならないのではないだろうか。

④「わたしも見てみたいなあ。」

思わずそうつぶやいた。

「アイスランド語だから、実際は見てわからないとは思うんですけどね。アイスランド語、めちゃくちゃ難しいらしいですよ。世界一難しい言語と言う人もいるんだそうです。」

英語ですら話せないのに、それは絶対無理である。

それでも、知らない言葉の響き^{ひび}を聞くのは、好きだ。同じツアーの参加者から聞こえるフランス語もロシア語も中国語も、わたしにとっては音楽みたいだ。

ふいに思った。なにかひとつくらい、言葉を勉強してみてもいいかもしれない。

それはわたしの人生に、ひさしぶりに点^ちった、遠い目標だった。

長い距離^{きょり}を走り、レイキャビクに帰ってきて、驚^{おどろ}いた。

夜なのに、街は煌々^{こうこう}と輝^{かがや}いている。車も走っていて、劇場や市民ホールらしき大きな建物もある。ずっとほとんどなにもない道を走り続けてきたから、わかる。ここは大会だ。

不思議だった。昨日きたときは、信じられないほど田舎^{いなか}だと思っていたのに、今は全然違^{ちが}って見える。

⑤ なんだか、急に目頭^{めがしら}が熱くなった。もしかしたら、世界はそういうものかもしれない。未来に希望なんてないと思っていたけど、違う場所から見たら、まったく違うように見えるのかもしれない。

バスを降りたときには、完全な空腹だった。秋月さんと一緒^{いっしょ}に、早足でホットドッグスタンドがある場所に向かう。秋月さんが言った。

「『全部のつけ』がおすすめらしいですよ。」

「全部のつけ？」

「トッピングもソースも全部のせてもらいます。たしか、生玉葱^{たまねぎ}とフライドオニオン、ケチャップにマスタード、タルタルソース。」

それはどう考えてもおもしろいだろう。

夜遅^{おそ}いのに、スタンドにはお客さんが並んでいた。後ろに並んで、ホットドッグとコーラを買い、カードで支払いをする。アイスランドは完全なキャッシュレス社会で、ドライブインであろうと、屋台であろうと、パン屋であろうとどこでもカードが使えるという話だった。

熱々の「全部のつけ」のホットドッグを受け取り、近くにあるテーブルでかぶりつく。

ソーセージの肉汁^{にくじゅう}が口の中にあふれ出す。生玉葱のさわやかさと、フライドオニオンのコク。そしてソースとマスタードが絡^{から}み合い、ジャンクだけど複雑なおいしさを生み出している。

なにより、肉の風味がいつも食べているソーセージと全然違う。

「これは……豚じゃないですよね。」

「ラムのソーセージだそうです。」

なるほど、ラムのソーセージはじめてだ。クセはそんなに感じない。

先に食べ終えて、メールをチェックしていた秋月さんが残念そうな声を出した。

「あー、残念。明日^{あした}も天気が悪くて、オーロラツアー、中止だそうです。」

わたしにはまだメールはきていないが、秋月さんのツアーが中止なら、わたしの予約しているツアーも同じだろう。

「明日が最後の機会なんですよね。」
明後日には帰国すると聞いている。

「そうなんです。残念。」

わたしも明日がダメなら、あと一日しかチャンスはない。

「まあ、また来ればいいか。」

そう、ほがらかに言える秋月さんがうらやましいと思った。わたしはもう二度と、こんな冒険はできないかもしれない。

最後かもしれない。その気持ちを勇気にして言ってみる。

「わたしもたぶん、明日、オーロラツアーは中止だと思います。もし、夜からご予約がなかったら……。」

「わ、晩ご飯ですよね。ぜひぜひ！」

わたしが言い終わる前に、彼女は笑顔でそう答えた。

「ひとり旅だと、晩ご飯、わびしいですもんね。」

わたしはまだ旅先で、ひとりで夕食を取ったことがない。最初の夜は疲れて、そのまま眠ってしまった。

ヨーロッパでいちばんおいしいホットドッグを食べ終えると、わたしたちは連絡先を交換した。日本に帰ってしまえば、もう会うことはないかもしれないけれど、そのアドレスは、わたしにとって宝物のように思えた。

ホテルに帰り、シャワーを浴びて、髪を洗う。ドライヤーで髪を乾かしてから、メールをチェックすると、オーロラ観測ツアーの中止の連絡が届いていた。明日は一日雨らしい。

今日もときどき雨が降っていた。憂鬱だが、市内観光ができるのは明日しかない。

ゆっくり髪を乾かしながら、考える。ずっと、のんびりお風呂に入って、なんの心配もなく髪を乾かしたいと思っていた。

⑧今は少なくともそれができる。

祖母に認知症の兆候が出たのは、わたしが大学一年生のときだった。母を中学の時に亡くし、それまでも家事はやっていたが、そこに祖母の介護が加わった。

当時のわたしは、まだ子供のようなもので、祖母を介護施設に入れるとか、在宅でも介護士を呼んで手伝ってもらうとか、考えることもできなかった。父も五つ年上の兄も、わたしが介護するのは当然のように考えていた。

あつという間に、祖母の病状は悪化していき、わたしは大学にも通えなくなってしまった。留年することになると、父は学費を出すことを渋り、わたしはそのまま中退することになった。

最初は数年で終わると思っていた。だが、祖母は認知症はあっても、身体は健康だった。祖母を介護施設に入れることは、父が反対して、叶わなかった。兄は積極的に父の味方をするわけでもなかったが、だからといって、わたしの味方もしてくれなかった。

兄が結婚して、家を出て行き、わたしが三十歳を越えても、介護の日々は続いた。

その頃には、ようやく、在宅介護のヘルパーなどと呼んで、自分の仕事を楽にすることも覚えたが、それでも長時間、家を空けるのは難しかった。

祖母を施設に入れることになったきっかけは、父の交通事故だった。背骨を骨折し、車椅子生活になった

父と祖母のふたりを、わたしひとりて介護するのは難しく、父はこれまで拒絶していたのが嘘のように、祖母の入所を認めた。

祖母は、施設に入って二年で、息を引き取った。

父の介護は続いたが、去年、兄が帰省したとき、甥が学校で感染した新型コロナが、家族全体に広がり、父は肺炎で亡くなった。

父が死んでも悲しくないと考えていた。本当はずっと恨んでいた。なのに、わたしは父の葬儀で泣きじゃくった。

こんなふうに、この世界にわたしをたったひとり取り残すなんてずると思った。それならわたしが先に死んで、父を苦しめてやりたかったと思った。

なにもない。わたしの人生には、輝かしい経歴も、なんの思い出も。もっと早く、家族なんか振り払って、飛び出していけばよかった。

それでもそれをしなかったのはわたし自身で、わたしは常に自分のことも責め続けずにはられない。

⑨ わたしの人生はパンしかないホットドッグみたいだ。全部のつけなんて、夢のまた夢なのだ。

秋月さんとは、ハルパというコンサートホールの前で、夕方六時に待ち合わせをした。

それまでの時間は、ゆっくり街を見て歩く予定だ。秋月さんはちよつと離れたショッピングモールに行ってみると言っていた。

朝食ビュッフェは、少し冒険して、スキルとニシンの酢漬けにも挑戦してみた。スキルはヨーグルトとはまた違うコクがあつておいしかったし、ニシンの酢漬けは、脂がのっている上に酸味がまるやかで、バターを塗った黒パンとよく合った。

やはり、パンが驚くほどおいしい。なにが違うのだろうと考える。昨夜、ネットでレイキャビクのおいしいパン屋を検索してみた。いくつか見つかったので、今日は昼ご飯代わりにパンの食べ歩きをするつもりだった。

ホテルを出て、有名なハットルグリムス教会に向かう。空を突くように尖った曲線の美しい建築物だ。教会の前に、モップみたいな大型犬がいて、わたしの匂いを嗅ぎにきてくれた。飼主さんに許可をもらってから触らせてもらう。もふもふした毛をゆっくり撫でると、ゆるやかに尻尾が揺れた。

教会の中もシンプルだが洗練された内装のため息が出そうだった。椅子に座って、しばらく静けさを味わってから、塔のてっぺんまでエレベーターで昇る。

色とりどりの屋根が並んだレイキャビクの街並みが一望できる。東京と比べたら小さな街だけれど、海沿いにはガラス張りの美しい現代建築などもあり、とても洗練されている。美しい街だ、と思った。わたしが知っている都会と違うだけで、ここも都会なのだ。

昼食には、調べたパン屋で、丸パンとシナモンロール、そしてドーナツを買った。どれも大きくて、お腹はいっぱいになってしまったが、やはりどれもおいしい。丸パンは、バターをつけなくても小麦の香りが口いっぱいに広がったし、シナモンロールもブラックコーヒーとともに合った。カルダモンらしき香りもして、日本で食べるシナモンロールとは全然違う。そして、ドーナツ。ただ砂糖をかけた揚げドーナツなのに、なんだか妙においしいのだ。生地に少し塩気があつて、それが甘さを引き立てる。

雨がぽつぽつ降ってきたから、目抜き通りのロイガヴェーグル大通りで、レインジャケットを一枚買った。

⑪ 鮮やかな黄色で、日本にいたときのわたしなら絶対選ばない色だが、それが欲しいと思った。

⑫ ハルパは海沿いにある巨大なコンサートホールだった。

昨日の帰り道も、教会の塔の上からも見えた。レイキャビクのランドマークのひとつだろう。秋月さんは先に来て、ベンチに座って海を眺めていた。わたしに気づくと大きく手を振る。

「そのレインジャケット、素敵。」

褒めてもらったのでお礼を言う。わたしは彼女と並んで座った。

「お腹空きました？」

そう聞かれて、わたしはちょっと考えた。まだお昼のパンが少しお腹に居座ってる感じだ。

「食べられますけど、すぐ空いてる……ってわけじゃないです。」

「わたしも。よかったらちよっとおしゃべりしませんか？」

わたしは頷く。秋月さんは、少し前屈みの姿勢になった。

「スウィングって知ってます？」

スウィング。単語としては聞いたことがある。たしかジャズ用語かなにかではないだろうか。でも、どういう意味かは知らない。

「ミュージカルのスウィングは、いくつもの役の歌と踊りを覚えて、誰かが休演したとき、すぐにでもその人の代わりに舞台上に立てるように控えている役割なんです。」

「すごく大変……。」

⑬ 「そう、めちゃくちゃ大変なんです。このあいだの舞台で、わたし、そのスウィングとして三ヶ月過ごしたんです。東京で一ヶ月、その後地方を回って二ヶ月。忘れないようにずっと稽古もして、いつでも舞台上に立てるように準備を欠かさずに、三ヶ月。最終的に誰も休演せずに、公演は最後まで走りきることができました。それは素晴らしい、幸せなことだし、コロナ禍では本当に難しいことだった。だから、残念だったとか、そんなふうにはまったく思っていない。その舞台も、カンパニーのみんなのことも大好きだった。」

彼女はそう言って微笑んだ。

「でも、なんだろう……やっぱり心のどこかが傷ついている気がするんです。それはわたしの仕事で、きちんと報酬ももらっていたし、スウィングをやるのは、実力がある人だけだから、キャリアとしてちゃんと次にもつながるんです。でも、心のどこかに、言うことを聞かない赤ん坊がいて、だだをこねている気がするんです。わたしも拍手を浴びたかったって。」

そう言うってから、こちらを見た秋月さんは驚いた顔になった。

「ちよっと佳奈さん、どうして泣いてるんですか！」

「え……わかんない……。」

自分でも気づかないうちにわたしはボロボロ泣いていた。

⑭ わたしも傷ついている。心のどこかで赤ん坊が泣いている。輝かしくて、まったく違う場所にいる彼女が、同じ思いを抱いているなんて、知らなかった。

「大丈夫です。わたし、大丈夫だから、泣かないで……。」

⑮ 「違うの……、これは……。」

たぶん、わたしは、わたしのために泣いているのだ。

わたしが涙を拭くと、秋月さんはようやくほっとした顔になった。

「だから、佳奈さん、一曲だけわたしの歌とダンス、見てくれませんか？ わたしのたったひとりの観客になつてくれませんか？」

「もちろんです！」

彼女は微笑むと、すつくと立ち上がった。

空気が一瞬で変わった気がした。

彼女はアカペラで歌い始め、踊り始める。聞いたことがないアップテンポの曲と、英語の歌詞。だが、彼女の声は澄んで、マイク無しでも遠くまで届きそうで、ダンスはまるで宙に浮いているように優雅だった。

※コケティッシュな表情と、微笑み、まるで大輪の花が咲くみたいだと思った。

あつという間に、彼女のまわりには人ばかりができる。

一曲は、短くて、それなのに、永遠に続いたように思えた。着ているのはレインジャケットと撥水生地^{はっすいきじ}のパンツなのに、彼女がターンをすると、華やかなドレスのようにジャケットの裾^{すそ}が広がった。

彼女が歌い終わると、あちこちから拍手が上がった。わたしも掌^{てのひら}が真っ赤になるくらい拍手をした。

彼女は、ちよつと照れたように微笑んだ。

(近藤史恵「オーロラが見られなくても」『おいしい旅 しあわせ編』より)

※(注)

レイキャビク＝アイスランドの首都。

スキル＝アイスランドのヨーグルト。濃厚な食感が特徴。

カルダモン＝清涼感のある香りのスパイス。

カンパニー＝キャストやスタッフ、関わった人すべてをふくめた座組。

コケティッシュ＝女性らしい魅力的なふるまい。

問一 ― 線①「それも嘘^{うそ}じゃないけど」とありますが、「それ」が指し示している内容を解答らんの「ということ。」につながるように文中から十字でぬき出して答えなさい。

問二 ― 線②「そのニュースを見たとき、今すぐ、レイキャビクに行つて、その舞台^{ぶたい}を見たいと思ったんです。」とありますが、「秋月さん」が「そのニュースを見たとき」に「その舞台を見たいと思った」のはなぜですか。それを説明した次の文の ー 3 にあてはまる言葉を、 ー は二字、 2・3 は七字でそれぞれ文中からぬき出して答えなさい。

世界中がロックダウンする中でも 1 な形で舞台を続け、演劇の 2 ようにしていることに 3 から。

問三 ― 線③「空気を感^{かん}じたい」とありますが、どういうことですか。次のアゝエの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 当時の舞台を見ることはできなくても、せめて劇場の雰囲気^{ふんいき}だけは体感したいということ。
イ 当時の劇場に行くことはできなくても、せめて舞台の持つ迫力^{はくりよく}だけは想像したいということ。
ウ 実際にたったひとりの観客になって、舞台の息づかいを肌^{はだ}で感じてみたいということ。
エ 実際にたったひとりの俳優^{俳優}になって、劇場特有の空気感を味わってみたいということ。

問四 ― 線④「わたしも見てみたいなあ。」とありますが、「わたしも見てみたいなあ」と感じたのはなぜですか。次のアゝエの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 秋月さんが劇場の魅力^{みりょく}について話してくれたことで、自分には無縁^{むえん}だと思っていた演劇の世界がほんの少しだけ身近なもののように感じられたから。
イ アイスランドで舞台を見る予定はなかったけれど、秋月さんと一緒に舞台を見ることができたら今回の旅がよりいっそう楽しくなるだろうと考えたから。
ウ 今までは大きな劇場で大勢の人を相手に演じる舞台が好きだったけれど、少人数かつ現地の言葉で行われるアイスランドの舞台にも興味を持ったから。
エ ひとりの俳優^{俳優}がひとりの観客のために演じる舞台なら、華やか^{はな}な場所が苦手なわたしでも場違^{ばちが}いに感じずに安心して見られるのではないかと思ったから。

問五 — 線⑤ 「急に目頭が熱くなった。」とありますが、このときのわたしの説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア レイキャビクは東京よりもはるかに都会なのかもしれないと気づきはじめている。
イ レイキャビクを田舎であるかのように錯覚していたことを不思議に思っている。
ウ 自分の未来に対する見方が変わって希望を持つことができそうな予感がしている。
エ 自分が見ている世界はあいまいなものだと気づいて新鮮な気持ちになっている。

問六 — 線⑥ 「秋月さんがうらやましいと思った。」とありますが、秋月さんのことを「うらやましい」と思ったのはなぜですか。それを説明した次の文の [] 1・2 にあてはまる言葉を、 [] 1 は文中から二十字以上二十五字以内でぬき出し、初めと終わりの三字を答え、 [] 2 は文中の言葉を使って二十字前後で答えなさい。

[] 1 わたしとちがい、秋月さんは [] 2 から。

問七 — 線⑦ 「そのアドレスは、わたしにとって宝物のように思えた。」とありますが、「宝物のように思えた」「そのアドレス」とはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 秋月さんとわたしが意気投合したことで交換できた、二人の友情の証ともいえる大事なものの。
イ 日本に帰ってしまえば使うことのない、アイスランド滞在中の数日間だけ使える貴重なものの。
ウ 秋月さんという存在の代わりであり、わたしの旅を何倍も豊かにしてくれるありがたいものの。
エ 自分が勇気を出して行動したことで得られた、秋月さんとのつながりを象徴する大切なものの。

問八 — 線⑧ 「今は少なくともそれができる。」とありますが、このときのわたしの状況や心情を説明したものと最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 予想はしていたもののオーロラツアー中止の連絡が届いて気分がふさいでしまいそうなので、その代わり明日は市内観光ができるようになったと言いついて聞かせて憂鬱さをまぎらわそうとしている。
イ 雨の中の市内観光となることが予想されて憂鬱ではあるが、家族の介護に追われて心休まることのない年月からようやく解放され、自由な時間を持つことができるありがたさをかみしめている。
ウ ホテルに戻ると秋月さんと一緒にいたときの気持ちの高まりが落ち着いて少しさびしさを感じるが、長年できなかった海外旅行で自分の時間をゆつくり取ることのできる幸せを感じている。
エ 長年ともに暮らしてきた父が他界したことをずっと悲しく思ってきたが、一人旅ができるほど父のいない生活に慣れた今では、何の心配もなく暮らすことのできる心地よさを実感している。

問九 ―― 線⑨ 「わたしの人生はパンしかないホットドッグみたいだ。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「パンしかないホットドッグ」とありますが、これと対照的なものとして文中にえがかれているものは何ですか。文中から十四字でぬき出して答えなさい。

2 「わたしの人生はパンしかないホットドッグみたいだ」という表現から、わたしは自分の「人生」に対してどのように感じていると考えられますか。次のア～オの中から適当なものを二つ選び、その記号を答えなさい。

ア 家族のために尽くしきれなかったふがない人生だと感じている。

イ 周りに流されてきたけれどどうもなかったと感じている。

ウ もっと早く自分の意志で行動していれば変えられたと感じている。

エ 誰にも愛されてこなかったひとりぼちの人生だと感じている。

オ 輝かしい経歴や思い出がなにもない空虚な人生だと感じている。

問十 ―― 線⑩ 「レイキャビクの街並みが一望できる。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 わたしはどこから「レイキャビクの街並み」を「一望」していますか。文中の言葉を使って十五字以上二十字以内で答えなさい。

2 この時のわたしの説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア レイキャビクの街並みにはカラフルな屋根のある建物がそびえ、都会よりも洗練された美しさがあることに圧倒されている。

イ レイキャビクの街並みには東京と同じようにぎやかさがあり、小さな街だけれど現代的な都会なのだと意外に感じている。

ウ レイキャビクの街並みには歴史的な建築物と現代的な建築物、さらには田舎と都会の要素が混在しているのだと驚いている。

エ レイキャビクの街並みには洗練度の高い美しさがあり、東京のような大都市とは違う意味で都会なのだと感動している。

問十一——⑪「鮮やかな黄色で、日本にいたときのわたしなら絶対選ばない色だが、それが欲しいと思っ

た。」とありますが、「それが欲しいと思った」のはなぜだと考えられますか。次のア、エの中から最も
適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 旅先で出会ったわたしもすぐに打ち解けられる秋月さんのほがらかさや、何事も前向きにとら
えられるおおらかさに触れ、わたしに足りなかったものは明るさだと気づき、まずは服装から明る
い色を取り入れてみようと思うようになっていたから。

イ 日本ではできなかった開放的な生活をしたり、今まで出会ったことのなかった秋月さんのような
素敵な女性と仲良くなれたりするうちに、いつの間にか日本にいたときのわたしには想像もつかな
いような、明るくて積極的なわたしになっていたから。

ウ 秋月さんに会ってから一緒にわくわくする時間を過ごしたり、ひとりで冒険をして現地の食事
や街並みの素晴らしさに気づいたりするうちに、今まで似合わないと思っていた明るい色にも挑戦
して、新しいわたしになってみたいと思ったから。

エ 今回は一人旅のつもりだったので地味な色の服しか持って来なかったけれど、このあと秋月さん
と会う約束をしているため、アイスランドで秋月さんとともにいる時間を思いきり楽しめるように
鮮やかな色を着て気分を高めたいと思ったから。

問十二——線⑫「ハルパは海沿いにある巨大なコンサートホールだった。」とありますが、わたしは何をす

るためにここにやってきたのですか。それを説明した次の文の

1は文中から五字以内でぬき出し、2は文中の言葉を使って五字以上十字以内で答え
なさい。

1 と一緒に 2 ため。

問十三——線⑬「このあいだの舞台で、わたし、そのスウィングとして三ヶ月過ごしたんです。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 秋月さんがしていた「スウィング」とはどのようなものですか。文中から五十五字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

2 秋月さんは「スウィング」として三ヶ月過ごした」ことについてどのように感じていますか。次のア・エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 三ヶ月間いつでも舞台上に立てるように準備をし続けるというすごく大変なことをやり遂げたのに、自分の実力が十分に評価されていないことに対して心のどこかが傷ついていると感じている。
イ 三ヶ月間苦楽をともにしたカンパニーのみんなのことは大好きなのに、誰も休演しなかったことでスウィングの自分とは出番がなくなり、拍手を浴びられなかったことで憎らしく感じている。
ウ 三ヶ月間スウィングとして過ごしたことで次のキャリアにつながることはわかっているのに、心のどこかで本当に拍手を浴びられるような女優になれるのかという将来への不安を感じている。
エ 三ヶ月間の公演で誰も休演することなく走りきれたことを本当に幸せだと思っているのに、自分も舞台上に上がり拍手を浴びたかったという心の声を完全に抑えることができないと感じている。

問十四——線⑭「同じ思いを抱いているなんて、知らなかった。」とありますが、「同じ思いを抱いている」とはどういうことですか。次のア・エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 秋月さんも私と同じように心が満たされずに割り切れない思いを抱いているということ。
イ 秋月さんも私と同じように誰からも注目してもらえない寂しさを抱いているということ。
ウ 秋月さんも私と同じように他人と自分を比べて人知れず劣等感を抱いているということ。
エ 秋月さんも私と同じように素を出せる仲間が欲しいという願望を抱いているということ。

問十五——線⑮「たぶん、わたしは、わたしのために泣いているのだ。」とありますが、「わたしのために泣いている」とはどういうことだと考えられますか。次のア・エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 秋月さんもわたしと同じような苦しみを抱えていたことに気づき、秋月さんの過去の自身に対する劣等感に共感して胸が苦しくなっているということ。
イ わたしが自分の心にふたをしながら頑張って生きてきたことに気づき、傷ついている自分自身をやっと認めることができて感情があふれ出したということ。
ウ 秋月さんが一人で抱え込んできた思いを初めてわたしに話してくれたので、秋月さんの役に立てる友人になることができた喜びを感じているということ。
エ 傷ついたわたしを同じような境遇の秋月さんが優しくなぐさめてくれたので、初めて他人の前で素直に感情を出すことができて安心しているということ。

問十六——線⑩「わたしも掌が真っ赤になるくらい拍手をした。」とありますが、このときのわたしについて

の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 仕事上の悩みをわたしに話してくれた秋月さんが披露する歌とダンスを見て、胸の内を一切感じさせないような優雅で華やかな演技に心奪われるとともに、秋月さんのように自分も強く生きていきたいと思っている。

イ わたしを観客に選んでくれた秋月さんが演じるミュージカルを見て、現実の苦しみを一瞬で忘れさせてくれるような演技に魅了されるとともに、秋月さんのように自分も誰かのために生きていきたいと感じている。

ウ わたしに本心を打ち明けてくれた秋月さんが心のままに披露する歌とダンスを見て、自然と多くの観衆があつまるほど華やかで情熱あふれる演技に心の底から感動するとともに、そのような秋月さんに自分を重ねている。

エ 秋月さんがわたしをほめますために演じるミュージカルを見て、優しさにあふれたあたたかい演技に胸が熱くなるとともに、そのような秋月さんに憧れて自分も誰かに元気をあげられる俳優になろうと決意している。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 委員をシヨウシユウする。
- ② 社会のルールをゲンシユする。
- ③ 会社に対する長年のコウロウが評価される。
- ④ 勇気を出してサイキヨをはかる。
- ⑤ クラブ活動の運営をマカされる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① お礼の品物の受け取りを固辞する。
- ② 帳場で支はらいをすませる。
- ③ 独善的なふるまいをしてはならない。
- ④ 買ってきた本を積んでおく。

問三 次の①～③について、ア～エの——線部の中には同じ漢字を用いるものが一組ずつあります。同じ漢字の用いられている文の記号とその漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① ア 赤ペンで下書きのコウセイをする。
イ コウセイな判断をくだす。
ウ これはコウセイに残る作品だ。
エ 委員会は七人でコウセイされている。
- ② ア ティッシュペーパーを作っているセイシ工場を見学する。
イ 友人の間にわって入ってけんかをセイシする。
ウ 富岡セイシ場は明治時代に建てられた。
エ ブレーキがこわれ、車はセイシしている。
- ③ ア シカクとなっていて、ここに注意して運転する。
イ 勉強をして語学のシカクを取る。
ウ とうふを一口大のシカクに切る。
エ ダチョウはシカクのするどい動物だと言われている。

問四 次の文は二つの意味にとることのできるあいまいな文です。二つの意味とはそれぞれどのような意味ですか。その意味の違いがはっきり分かるように例にならって書き直しなさい。（書き直すときに、他の言葉に置きかえたり、読点を加えたりしても構いません。）

例 私は妹に自分の部屋で勉強させた。

意味1 私は妹に私の部屋で勉強させた。

意味2 私は妹に妹の部屋で勉強させた。

私と母と妹三人で買い物にでかけた。

意味1…

意味2…

